

夕焼けを見ると不安や苦しみ
が沸き上がって、気分が悪くなる
んです

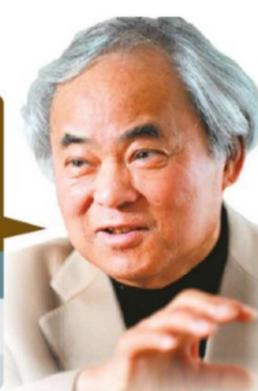


おかだ えみこ
岡田 恵美子さん

広島を証言を国内外で30年以上。
21年に84歳で死去

第185回 15年春

人間は忘れるから生きられる。でも、
忘れてはいけないことがある



なかざわ けいじ
中沢 啓治さん

漫画「はだしのゲン」作者。
2012年に73歳で死去

第12回 2006年秋

苦しみに耐えた分、核兵器廃絶
の運動を頑張ってきた分、命が
延びたのかもしれない



たにくち すみてる
谷口 稔さん

長崎原爆被災者協議会会長など
歴任。17年に88歳で死去

第211回 17年冬

使った米国人は憎まない。使われ
た核兵器を憎む。それが悪そ
のものだから



つちやま ひでお
土山 秀夫さん

元長崎大学長。
17年に92歳で死去

第104回 10年春

人間性を否定する兵器で、国家
の安全を保とうとする。これが許
せないですね



ともなが まさお
朝長 万左男さん

日赤長崎原爆病院
名誉院長

第220回 17年秋

食品に含まれるセシウムには敏
感でも、世界にある核兵器の数
には鈍感



なす まさもと
那須 正幹さん

東京電力福島第1原発事故を受けて
児童文学作家。
21年に79歳で死去

第133回 12年冬

過去のことは変えられない。でも、
未来はどのようにでもできる
じゃろう



つばい すなお
坪井 直さん

広島県原爆被害者団体協議会理事長
など歴任。21年に96歳で死去

第265回 20年12月

私の講話は役立っているのかし
ら。子どもたちにうまく伝わっ
ていないのではないのでしょうか



しもひら さくえ
下平 作江さん

長崎の被爆体験講話を
1万回以上

第170回 14年春

時代を捉え続けた試み



くぼた・あきこ 1970年生まれ、東京都出身。高校の地理歴史科講師などを経て、2015年から広島大原爆放射線医学研究所付属被ばく資料調査解析部の助教。

被爆者の体験や人生を知りたければ証言集を読めばよいのかも。被爆者の報道は、取材記者が介入することにより新たな情報を引き出し、醒め味がある。

過酷な体験や苦難の人生を自分の息子や娘には話せないが、第三者である記者になれば赤裸々に明かせる人もいるだろう。プロのジャーナリストになればこそ、被爆者の気持ちをほぐすように心境を引き出せることもあるはずだ。

被爆者として生きた歲月そのものが「生きる支え」になっている人もいるだろう。「私」という像をどう語りたいのか。そう思っている被爆者が、自分の考えを引き出し、お互いが同調しながら、被爆の実相を明らかにしていく。事実に基づいた上での「語り」が読み応えにつながる。

取材手法として、同じ被爆者から長い期間、定点観測の

「被爆者なき時代」のカウンタダウンは既に始まっている。被爆者が語れなくなったとき、どんな話を報じるのか。それを考える際に忘れてはならないのは、表に出て話できなかった被爆者は、ほんの一部に過ぎないことだ。語れなかった「語り」というものがある。難しいテーマだが、それを引き出し、書いて残してほしい。それは被爆者と伴走してきた人々にとって、さらには後の世代への歴史的な資料となる。【聞き手・宇城昇】

広島大原爆放射線医学研(アーカイブズ学)

久保田明子助教

広島、長崎の原爆を体験した人々の言葉と生き様を記録し、後世に残すさまざまな努力が積み重ねられてきた。原爆投下から79年になろうとしている今、被爆者の肉声を報道し続ける意義について、広島大原爆放射線医学研究所の久保田明子助教(アーカイブズ学)に聞いた。

核廃絶願い 証言300回

核兵器のない世界への道のりは何と険しいのか。それでも歩みを止めるわけにはいかない——。毎日新聞が広島、長崎で原爆の惨禍を体験した人たちの記録報道「ヒバクシャ」を始めたのは2006年秋。被爆者と伴走しながら18年にわたって連載は続き、掲載回数は今春で300回を超えた。被爆者から大切なものを受け取りながら、取材は続いている。【宇城昇】

被爆者が語ると言っても、全ての人たちが語っているわけではもちろんない。被爆した人全体のどのくらいのパーセントの人たちが重い口を開いているのだろうか。語られない沈黙の意味を何とか記事でも取り上げてほしいと願いつつ、毎日新聞の「ヒバクシャ」の連載が2006年以来、300回になったという取り組みに心からの敬意を表したいと思う。上に名前が載っている方々は全部で8人、そのうち6人の方々はすでに亡くなってしまっている。急がなくては…。

ヒバクシャ